

知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】平成30年2月7日（水）

午後1時30分～3時30分

【会場】西伊豆町中央公民館

多目的ホール

1 出席者

- ・ 発言者 西伊豆町及び松崎町において様々な分野で活躍中の方
6名（男性3名、女性3名）
- ・ 傍聴者 120人

2 発言意見

番号	分野・所属	項目	頁
発言者 1	地域活動	地域の資源や魅力の発信	3
2	農業	農業の活性化	6
3	ボランティア	地域におけるボランティア活動	10
4	地域交流	手づくり市による地域交流	11
5	食文化	しお鯉の知名度の向上	16
6	地域活動	地域資源を生かした町づくり	19
2	農業	農家の高齢化	26
傍聴者 1	景観	伊豆半島の景観行政	28

【川勝知事】 西伊豆町、松崎町の皆様方、川勝平太でございます。

私、昨日からこの賀茂地域に入っております、移動知事室というのの真ただ中でございます。私、知事を預かって9年目に入っておりますけれども、伊豆半島には百数十回足を運んでいております。

今日は、この夕日が美しい西伊豆、そしてまた松崎といえば、石部の棚田もございまして、最近では依田勉三さんが生まれた依田家を町が取得されまして、すばらしい形で今再生されようとしておりますし、さまざまなこの地域のよさが、それぞれの個性を生かして今PRされつつあります。

それからまた、先ほど実はジオサイトの1つ、黄金崎を見てまいりました。松崎高等学校の生徒さん7、8名が来てくれていまして、そしてその説明を受けました。またジオパークを案内するジオガイドの素晴らしい御婦人がいらっしゃいまして、もうすごい人なんです。ものすごい人で、それはもう英語から日本語から伊豆半島のことは全部体の中に入っている。馬ロック、これを今日はもう富士山が見え、南アルプスが見え、世界で最も美しい湾と認定されている駿河湾を眼下に望みながら御説明を受けまして、本当にこれはもう世界で最も美しい半島だなということを感じて、朝はもう8時過ぎから動いているものですから、お腹減ったなと思ったら、西伊豆町まちづくり協議会というのがありまして、そこに食部会というのがありまして、その食部会で、今、お食事を町長先生たちと御一緒にいただいたわけですが、これがまた美味しくて、見たときは無茶苦茶多いと思ったんですが、全部食べました。本当ですよ。

そしてそれだけじゃありません。実はここにお花が飾ってありますが、そこにも、昨日河津にも行って来たんですけれども、河津桜、まだ咲いてはいませんでしたけれども、何か今日のために温めて咲かせて、それがテーブルに置いてあって、伊豆半島に春が来たということ、あるいは心の中に春を伝えてくださるような、そんな温かいもてなしを受けたわけです。

さて、今日は広聴会、広く聴く会です。皆さんに誤解していただきたくないのは、聞きっ放しの会でないということなんです。今日お聞きする町の代表の皆様方の御意見は、もし何か言われて、この場で答えられたら答えますが、答えられなくて宿題になったものは持ち帰りまして、必ずお返事を差し上げます。

お聞きしたことは責任を持って、これからの市民、町民、県民のためになるということであれば、これを進めるというための広聴会でございます、しっかり今日はお話を承り

まして、これが将来の西伊豆、あるいは松崎町、またはジオパーク認定間近の伊豆半島のためになるような会になりますことを御祈念申し上げまして挨拶といたします。長丁場ですけれども、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

【発言者1】 発言者1でございます。よろしくお願いいたします。ただいま知事から力強いお言葉をいただきましたので、私の糸コンセプトについて少しお話しさせていただきます。

この糸コンセプトは、そもそもそれぞれ何らかの形で活動している若い子育て真っ只中のお母様方が7人、女性だけのグループで集まってできています。それぞれが活動の中で今住んでいるまちについて、こうあってほしい、それから子どものためにこれからのまちはこうあって、子どもに残していけるものは何かということ話し合った結果ですが、既に西伊豆には素晴らしい自然がありますし、先人たちが残してくれた郷土の歴史ですとか、伝統文化などがあるわけで、その中で女性の感性で、それから女性だからこそできるアプローチ、それをやって、今までにないような松崎を表現するということを発信していくべきではないかということで、私たちが提案しておりましたプログラムが昨年静岡県文化プログラムに採択されて、このオリンピックに向けての4年間、それだけではなく、継続していけるように活動をしていきたいと考えております。

それで、活動の中で文化的なことであるとか、芸術に関することというのは、目に見える効果がなかなかすぐには現われないために、その活動の内容も十分に理解されることが多々ある中、この静岡県の文化プログラムは全国に先駆けて川勝知事がいち早く推進していただいたので、私たちの活動もそれに磨きをかけるように、昨年からは開始いたしました。

それで、その文化プログラムなんですけれども、コーディネーターの方が各団体についてくださりまして、外部から情報ですとかアドバイスをいただけるということが、今までにない取組だと考えます。それで、その外部からのアドバイスなどがあるおかげで、活動の内容も、とてもグレードが上がりますし、私たちのモチベーションも上がって、一層活動が充実してくるのは、とても実際やっけていて感謝しております。

ただ、ちょっと最近では、その文化プログラムにおいて、取り決めが中止になるといううわさとか、記事を読んだんですけれども、それは後で知事に伺いたいと思います。

私たちのプログラムの中心になっております松崎町から発信するという意味で私たちが

取り組んでいるのは、「マツタキ今昔物語」と題して、ガイドブックのようなものを製作する予定であります。これはポリネシア語でマツザキをマツタキとって、清い心のきれいな人たちが住んでいるという意味だそうです。

そんなことから私たちは去年から採択以後、町の魅力ある人、それから事柄、それから美しい風景を切り取って、伝説の世界と現実が交錯するような、今までにない試みを、新しい世界観を打ち出したような、そんなガイドブックにしていきたいと思っております。ですので、今までにない客層ですとか、その方々の興味や関心を惹くことができるのではないかと期待しております。

その根幹になりますガイドブックの製作に伴って、昨年活動いたしましたのは、「伝統を遊ぶ」ということで、9月に狂言LABOとって、大蔵流の狂言師さんに実際来ていただきまして、体験してみようということで企画いたしました。松崎町は秋のお祭りに、この小さな町の中で3カ所の神社で三番叟が奉納されております。それはとても珍しいことのように、11月にその狂言師さんもそのお祭りに来ていただいたんですけれども、口伝承の割には、それは正確で、とても興味深いというアドバイスをいただき、これは観光につなげられるんじゃないかという提案もいただきました。

それで、ここ近年子どもが少ないので、それを伝承していくというのが心配されることなんですけれども、そんな中で、それが観光に結びついたら、またそれから町民の伝統芸能に対する興味なども湧いて、また町自体も盛り上がるのではないかと考えております。

また、昨年ですが、11月には町民の森である牛原山において、自然の中で子どもが遊びを見つけ、それから自分たちの力で遊びをつくる中で未来を創造するという創造力を身につけるという企画を考えました。

その企画の内容なんですけれども、「野山 no Life」と題しまして、摘み草ですね、そのときは松崎町花でありますツワブキの葉っぱのナムルを作ってみたりとか、それはとてもお味もよくて大好評でした。火おこし体験ですとか、薪割り体験、それからネイチャークラフト、皆さんで木の実を拾ったりとかして、それでオブジェを作ったりとか、それでアウトドアのテーブルセッティングをして、お昼を皆さんでいただきました。

その各ワークショップを自由な形で興味あるところに参加していただくということで、そのメインの会場になりました中心に大きなヤマモモの木があるんですけれども、その木を前もって町内外の編み物愛好家たちが、編み物でそのヤマモモの木の幹から枝に向けて編みくるむというヨーロッパで流行っている Yarn Bombing という編み物アートの一つなん

ですけれども、それで会場を飾りました。これは突然町に訪れた観光客なんかも写真にアップして、インスタグラムとかに載せて、一時ちょっと話題にもなりました。

また、このとき、植物に詳しい先生をお招きいたしまして、一つ一つの貴重な植物にまつわるお話を伺ったんですけれども、その先生も御自身の新聞のコラムにも紹介していただきました。

また、それを見た町内の介護施設の職員の方から、そこにはお年寄りが、かなり皆さん編み物がお好きで、そのことを知って自分たちもやってみたいと、ぜひ参加したいと。そのことによって、またそれを見に、自分たちが作ったものを足を運んでまちに見に行くということも励みになるというとても嬉しいお話を伺って、これはどんどん遊び楽しいことは山から下りてくるというとても嬉しいお話を伺って、これほど遊ぶ場所を探して編み込んでいきたいなと計画はしております。

また、その前日に松崎町と同じく「日本で最も美しい村」連合に加盟しております鳥取県の智頭町で園舎を持たない森の幼稚園の先生をお招きいたしまして、講演会をいたしました。その翌日にその牛原山でお散歩会という体験会を、また同時に牛原山で開催いたしました。

なぜかと申しますと、この智頭町では、そういう自然の中で子どもを育てたいと思っている家族が移り住んで、結構地域の活性化に貢献したという事例もあることから、牛原山もただ町民の森だけではなく、自然資源の再認識とか、有効活用だけではないのではないか。一つの観光スポットとして考えられるのではないかという思いで企画し、只今、それに向けても模索中でございます。

今年度は1月に、それと関連いたしまして、東京の世田谷にあるプレイパークというところは、民間とそれから行政、それから町の町内会の方々の御協力の元で運営している公園を視察に行っていました。その中で、自然が育む子どもにとって遊びというのは、大人たちが遊具やなんかを考えたり与えたりするものではなく、子どもが要望するものを大人が作って、それを遊具にしたり、ただ大人は子どもを見守るという役割で、子どもは自分の遊びに責任を持って、自発的に、そして自由に遊んでいくという姿を見て、やはり子どもにとって自然が身近に感じられるということは、その資源を大切にしようし、また自然に対する慈しみの心も芽生えるのではないかと、そういうふう感じております。

それで、また今年度は引き続きこのプログラムをまた深く掘り下げて活動してまいりたいと思っています。以上です。

【発言者2】 発言者2です。よろしくお願いします。僕はちょっとグループの代表とかじゃないワサビ農家なので、ちょっと個人的なお話になりますが、僕は名古屋出身で、21歳のころから海外でバックパッカーとって、ずっと旅をしていました。そのときに農業のバイトなどをしながら7年間旅をし、日本に帰ってきて自給的な暮らしがしたいと思い、伊豆半島の西伊豆町にやってきました。

初めの4年ぐらいは自給的な暮らしをしていたんですが、農業は楽しいなと思い、職業にしたいなと思い、近くにワサビ沢がある環境の集落にいましたので、ぜひワサビをやってみたいと思い、西伊豆町のワサビ農家さんのところに相談に行ったところ、快く受け入れてくださり、さらにたまたま県の研修制度の条件に一致し、町と賀茂農林の協力で1年間研修生という形でワサビ農家さんのところに研修させていただき、独立して今3年目になります。現在は田んぼや野菜を自分で食べる分を作りながら、ワサビ沢を3カ所、1反5畝程度やっています。

そして販路は、ほとんど今ふるさと納税に西伊豆町さんは本当に力を入れてくださっていますので、ほとんどの9割はふるさと納税でやらせていただいています。

それで、ふるさと納税で出させていただいて、多くのリピーターの人や、全国のワサビを食べた中で西伊豆町のワサビが一番おいしかったとかのメールをいただいて、これはもう先輩農家さんの御指導はもちろんですが、今ジオパークで話題になっています西伊豆町は独特の地形で、これは雨を貯めて豊富な湧き水を提供してくれるという伊豆半島独特の地形の恩恵をワサビも受けていると思うので、ジオパーク認定され、ワサビも世界農業遺産に認定されて、伊豆半島とワサビが活性化されるといいなと思っています。

現在、山の中で車を止めて10分程度歩いて、背負子でワサビを収穫し、背負子で車まで持ってくるという沢もありますので、その沢に今年はモノレールを設置して効率化を図ったり、まだ沢の途中のダムが壊れているところもあるので、直して、もうちょっと面積を増やしたりして、作業をやっていききたいなと思っています。

あとちょっと苦手な部分なんですけど、やっぱり経営の部分もやっていけないと農家はいけないので、今年は賀茂農林の専門家派遣事業というのを利用させていただいて、宣伝用のパンフレットやホームページも作成していききたいなと思っています。

今住んでいる集落なんですけれども、うちの上の子どもが生まれたのが10年ぶりの子どもというような、何か過疎を肌で感じるような集落に住んでいますので、将来は移住した

い人や農業やりたいなという人の力になれるような農家になりたいと思っています。ありがとうございます。

【川勝知事】 それぞれ松崎町、西伊豆町のお二人からお話をいただきまして、発言者1さんは本当に哲学を持ってなさっておられるのに感心した次第です。文化プログラムというのは、実はオリンピックと関係してまして、オリンピックには憲章というのがあります。オリンピック憲章をごらんになりますと、「スポーツと文化の祭典」と書かれているわけです。通常はスポーツだけというふうに思いがちなんですが、実際はそれぞれの国の、あるいはそれぞれの都市のいろいろな文化的なものの形のおもてなしもしているんですね。

ところが、それを本格的にしたのが2012年、前はリオデジャネイロ、その前がロンドンですけれども、そのロンドンでのオリンピックのときに、ロンドンだけでなく、イギリス国中でそれぞれのまちですばらしい文化資源をお持ちなので、そこで文化イベントをばあっとやったわけです。そうするとロンドンのオリンピックを見に来た方たちがそれを知って見に行くと。けれども、航空券も買ってあるということで帰られる。また来たいということでリピーターが増えまして、オリンピックの翌年である2013年の方がイギリスを訪問される方が増えたとか、そうしたことを知りまして、それも国策としてきちっとされたということを知りまして、全国知事会で、東京オリンピックだけれども、これやったらどうですかと言ったら、北海道、東北とか、九州だとか、東京オリンピックと関係ないと思っていた知事さんも、それはいいことだと、日本全体を文化プログラムで知っていただきましょうということになりまして、そしてそれが今日本の政府の方針にもなったわけです。

そうした中で、我々が言い出したものですから、文化プログラムというのを発足させましょうということで、文化プログラム委員会というのをやりまして、そこに発言者1さんのところもやられているということでございまして、何かそれで選ばれたものがだめになるとかということはないはずですから、発言者1さんのような方が外されるということが初めて今聞きまして、そんなことはないですよ、ないはずですよ。むしろ増やしたいというふうに思っているわけですね。

これは一過性のもではなくて、自分たちの地域の資源を世界にアピールするにはどうしたらいいかということを考えなくちゃいけないきっかけにもなります。ジオパークとかワサビとか、それから先ほどおっしゃった「日本で最も美しい村」連合があるんですが、

私は静岡県版をつくろうと思ひまして、日本で一番美しい村になるのは大変ですから、資格審査が。それで美しく品格のある邑としてやりませんかと言ったら、松崎町がトップに手を挙げられまして、今 100 以上のいろいろな集落の方たちが登録されています。そのうち「日本で最も美しい村」として登録されたのは、松崎町がトップです、静岡県下では。2番目が川根本町です。ですから、これ本当にレベル高いんですよ。

そこで、牛原山などを中心にして、子どもたちに建物のないところで子どもを教育していこうと。これを薪割りだとか、火おこしだとか、本当に忘れられない体験をさせてあげるといことがとても重要だと思います。それと同時に狂言、あるいは松崎町に残っている依田勉三さんの家を見てもすぐわかりますけれども、やっぱりここはちょっとやそっとじゃないなと思っていたら、今もう驚きましたね。

マツタキというのは、ポリネシア語で清い心を持った人たちが住んでいるところだと。ポリネシアといっても、何か南の方ですから、あっそうか黒潮乗ってきたのかということですね。スルガと言えば、マレー語で天国という意味でしょう。ですからいっぱい色々な人が来ておられるんだということはわかりますが、その意味でここは世界の色々な民族の博物館ではないかと。元々伊豆半島それ自体が南海の贈り物ですから、そういう意味で伝統、文化、自然、こうしたものを今にどのように表現するか。

保育園、幼稚園、小学校、中学校、高校の学校だけでなく、こういう糸コンセプトのような方の活躍がこれからはますます重要になってくるだろうというふうに思う次第です。

それから発言者2さんは、名古屋出身ですか。7年間も世界を放浪したんですって。親御さんはえらい心配だったと思いますが、そういう肥えた目を持って選んだのが西伊豆だった。行った甲斐がありました。親御さんも喜ばれて、そして彼は戻ってきて、そして本県がやっている研修に参加していただいて、プロになってといいますか、本格的にワサビを栽培されているときに、ワサビが日本農業遺産に認定され、間もなくワサビは世界農業遺産になると、それを担うわけですから、そして西伊豆の町長さんがふるさと納税を上手に御活用して、これで確実に買って、それをお届けすると。そうするとそれが市場を増やしていくと、おいしい、どこから来ている？西伊豆だと、どこだ？これは発言者2さんのところだと、そこに注文するというふうにすれば、そのふるさと納税が結果的に波及効果を持って、市場を広げていくということじゃないでしょうか。

しかし、西伊豆だけじゃない、松崎でも作っている、伊豆でも作っている、ほんまものところを1回見たいものだと。そこには清冽な水がある。この間来られたユネスコの先

生も、その水の美しさに度肝を抜かれたわけですね。清潔な水というのが我々にとっては当たり前みたいですが、それというのは実は希有なことだと。

大体湯ヶ島で子どものときに過ごされた井上靖先生が『母』というのを書かれて、映画になったじゃないですか。一番最初は湯ヶ島あたりのところじゃないでしょうか。その石式ですか、ああいう段をつくって、それをやるところで、本当にきれいな水が流れているのを最初に見せましたね。あれで皆感動するわけですね。あっこれが日本だというふうに感動する。

それに今、名古屋生まれの発言者2さんが感動して、それを広げたいと。モノレールを作りたいと、それから幾つかの石垣でだめなところを修復して広げたいと。そして子どもが生まれたということですね。そして私はこういう方を実はやっぱり西伊豆中学や、あるいは松崎中学や、あるいは賀茂中学やそういうところからやってみたいと思わせるようにできないものかと。

なぜそんなことを言うかという、それは藤井聡太君です。14歳で将棋の道に決めたでしょう。10代の前半で決めているわけですね。ですから10代の前半で決められるんだと。この間、漁業高等学園というのがありまして、県立の、そこに行って1年間で海の男になりたいと、いつ決めたか、皆に聞いたんですよ。20人ぐらいしかいません。皆、小学生か、遅くとも中学生です。これになりたいと思っているわけです。だれがそういうふうにさせるかという地域の人です。

発言者1さんがやっていたら、発言者2さんがやっていたら、これはもう実学です。大人の背中を見て、あるいは色々なお話を聞いて、私もこういうふうになりたいと思わせたら勝ちだと思うんです。

もうだから10前後から10代の前半ぐらいまで、昔で言えば元服は15歳ですから、数えですから、満でいえば14歳で大人扱いにするわけですね。そのころまでに生きる道として、世界で最も美しい伊豆半島で何かできないかというときに、どうしたらいいか。私、見に行ったらいいと思うんですよ。

発言者2さんみたいに世界を見たら、自分のことが発見されます、自分の育ててくれた環境を。そういうものの格好の事例が発言者2さんではないかというふうに思いますね。発言者1さんがやっていたら、血のつながりのない地域の子ども、この子どもたちに教育を施されているわけでしょう。あるいはその心を育てられている。

みんなでその地域の有能な女性や男性が、自分の余裕のある限りにおいて育てていくと

いうそういうことをしていく時代が来ているので、それが結果的に人口増加にもつながっていくと。そして発言者1さんがおっしゃるように、観光にもつながっていくだろうと。観光につながるべき理由は、ディスティネーション・キャンペーンが来年です。

しかし、プレキャンペーンがこの5月から始まります。全国から800社の人たちが静岡県に来て、JR6社がいろいろと観光キャンペーンの商品を造成していきます。来年が本番です。再来年がアフターキャンペーンです。オリパラが来ます。オリパラのプレオリンピック、プレ競技大会が来年開かれます。ラグビー・ワールドカップも来ます。そして文化プログラムが全県で動きます。ですから人が来るようなそういう客観的条件ができております。そして飛行場も建物が2倍になります、この11月にできます。今1時間に1本しか処理できない外国のお客様が1時間に3本処理できるようになります。

そういうことで条件が揃ってきておりまして、一番必要なのは若い人が、あるいは若いうちに外を見るということじゃないかというふうに思いますね。そして来るのを待つのではなくて、出て行って相手を知るといふそういうことが大事なのではないかということも発言者2さんの話を聞きながら思った次第です。ちょっと長くなってすみませんでした。素晴らしいお話をありがとうございました。

【発言者3】 ボランティアの代表として、西伊豆町社会福祉協議会の理事をさせていただいております発言者3と申します。よろしくお願いいたします。

今、町ではいろんなボランティア活動が盛んに行われています。その中で私が携わっていますのは、高齢者サロンのサポーター、介護予防リーダー、認知症のサポーターを養成するキャラバンメイト、災害ボランティアコーディネーターの4つです。

遡りますが、平成12年から私は地元にある小さなデイサービスに勤めておりました。24年に退職後、当時の民生委員さんに頼まれまして、地元の高齢者サロンの運営を引き継いだのがボランティアの始まりです。

地元で協力してくださる仲間の方たちと、月1回どんな形でやっていこうかと相談しながら、今の形になるまでに1年近くかかりました。それこそ初めは、2時間の間に何をしようか、また地元の人たちに相対するだけで緊張のあまりぐったり、肩に力が入り過ぎの状態でした。

お昼をみんなで一緒に食べれば、おしゃべりもできるし、メニューも少なくできるしと、材料費だけいただいて作り始めました。時間の流れとともに、それぞれの得意な分野を繋

ぎ合わせて、だんだんと一つの形になってきました。昼食作りもボランティアの楽しみの一つになりました。

その後は包括支援センター主催の介護予防リーダー講習会をみんなで受けました。私たちの年代に今後起きるであろうと体の変化と、必要な運動、ロコモティブ症候群の予防、運動時の注意点など、勉強させていただきました。

サロンの目的は、年をとっても、住んでいる地区でみんなで楽しく助け合って生活していくということで、今サロンはだんだん1つの家族になっている気がしています。ボランティア仲間は大切な友であり、参加してくださる人たちは一歩前を進む先輩です。今、私自身も老いを迎えてつあります。老いても楽しく暮らせる場所づくりは、自分自身の問題でもあるのです。

町では昨年からは地域リハビリテーション連絡会を始められ、リハビリに関わる医療の人たち、介護施設の人たち、ボランティアの人たち、そして福祉課の職員の人たちが、今後町の健康寿命をどう延ばしていこうかと取り組まれています。

この2月1日からラジオ体操の普及ということで、保健センターでモデル事業に取り組んでいる最中です。4月からは町内のいろいろな場所でラジオ体操をする姿が見られるようになっていけばと、今からわくわくしています。自分自身の健康をキープしながら、周りの人たちと「おはよう」「元気」と声を掛け合える町を皆さんとつくっていったらと夢を描いています。

また、サロン活動と並行して、もし津波が来たらどうしようと、平成25年に災害ボランティアコーディネーターの講習を受けました。そして会が結成されて間もない7月18日、この安良里地区を集中豪雨が襲いました。何もわからないながら、災害ボランティア本部のお手伝いをしたり、実際に安良里へボランティアにも行きました。床下の泥水をみんなで連携して汲み出し、雑巾できれいに拭きました。終わった後、そこの家のおじいさんが、涙を浮かべておられた姿を今も忘れません。

日頃やっていることは、物事に当たってもやれると言われます。熱心でパワフルな代表のもと、現在も年間計画を立てて活動を継続しています。この代表というのは、先ほど知事様を安良里のところで御案内した方のことです。以上です。

【発言者4】 こんにちは。私は発言者4と申します。主人が住職でして、無住になってしまって3年ぐらいたっているお寺に夫婦で移住してきて10年ほど経ちます。

今回「手づくり市」のお話でお呼びいただいたんですけれども、その前になぜこういうイベント事をお寺で行っているのかというところをお話しさせていただきたいと思うんですが、もう何十年というか、何年も前から全国的に、特に都会の方はそうだと思うんですが、寺離れという言葉が挙がってきています。心がお寺から離れてしまう原因の一つとして、時代の変化というのもあると思うんですが、お寺側にもたくさん問題があるんじゃないかと私たちは思っています。

昔は、お年寄りが何気なく立ち寄ってお茶をしたり、お話をしたり、子どもが公園のように庭で遊んでいるというのは、ごく普通の光景だったと思うんですが、今の現在、亡くなってから関わる場所、お葬式・法事で関わる場所、普段は立ち入らない場所というようなイメージがお寺にはどこもあると思います。

本来はやっぱり気軽に立ち寄っていただいて、ちょっとした悩みでも聞いてあげられるような、心の拠り所のような場所であるべきだと、住職共々思っているんですが、まずお寺に皆さんがお越しいただかない現状をどうするかというところで、お寺特有の元々ある御彼岸ですとか、施餓鬼ですとか、そういう行事ももちろんなんですが、それに加え、皆さんが興味を持っていただけるようなイベント事を考え、さまざまなことを実行しているところです。

その一つ的手段として、手作り限定の市をお寺の方で行っております。おかげさまで今度3月17日にこういう形で第5回目を開催する予定でおります。現在参加いただいているのが30店以上の出店者さんと、当日お客さんとしてお越しいただいているのが、大体その1日で1,000人近くのお客様にお越しいただいています。松崎町だけではなく、町外からも伊東や横浜の方からもお越しいただいたり、参加したりしていただいています。

ものづくりというのは、趣味の範囲というところもあるんですけれども、やはり思いやパワーがすごくあると思うんです。手芸というのは世代を超えて、お仕事をやめられた方であったり、今子育て真っ最中のママであったりしても、世代を越えて同じように趣味にしている方が多いのではないかと考えております。

なので、やはりイベント当日もさまざまな世代の方が来ていただいて、たくさんその場でコミュニケーションが生まれて、そこからまた新しいはじめましてのつながりができていて、日常的ではないにしても、お寺に人が集う、その日には人がたくさん集うような状況が今できているのかなというふうに思っています。

私は住職ではありませんし、お経もちろん読めませんし、説法ができるわけでもない

ですが、じゃそのときに私がお寺に住んでいてできることは何だろうなと思ったときに、やはり住職よりも地域の方に近い形で、楽しいことも大変なことも一緒に行動することで、共感することで、コミュニケーションをとっていくことが大事なのではないかなと思っております。

私も今子育て真っ最中で、同じような子どもを持つ世代のお母さんたちとの交流も大切にしていきたいですし、お寺の奥さんとして檀家の世帯主の方たちと関わる機会も大事にしていけたらなと思っております。

今の手作り市の延長でワークショップという形で、今はその手作り市の中でアクセサリなんかを販売していただいたりしているんですが、そちらを一緒に作る形で、その場で作り方を学んだり、考えを学んだりする場を設けておりますが、お寺は昔学びの場であったと思うんですが、やはり何かを失ってから来るような場所ではなく、何かを得るために来てもらえるようなお寺にできたらなと思っております。それは少しでも町おこしの原動力になったりだとか、町の人々の活力につながればいいのではないかなと思っております。

それで、先ほどの発言者1さんのお話にあった絲コンセプトの方に私も参加させていただいているんですが、オリンピックを目指して文化的な部分をとという話があると思うんですけれども、その土地の文化を語る、知るとなると、やはり神社仏閣は避けられない場所ではないかなと思います。

今というか、もう江戸時代から続いているんですが、伊豆には四国と同じようにお遍路さんがありまして、伊豆八十八ヶ所霊場巡りというのがあるんですが、そちらを盛り上げようという形の動きが少しありまして、伊豆の文化を伝えるためには、お遍路さんというのも少しお出でいただけたらうれしいなと思っていますところなんです。

実際はといいますと、無住のお寺が多くて、どうしてもお遍路さんを四国と同じように活性化させるというのは、なかなか難しいことなんですけど、伊豆の文化を語る上で、昔ながらの信仰心だとか、お寺ではないですけども、神社の方でいうと、昔の民話であったりだとか、そういう目に見えないものを大事にする心というのは、日本人のいいところだと、強いところだと思っていますので、そういう部分を大事にしつつ、オリンピックに向けて伊豆の文化を伝えていけたらいいんじゃないかなというふうに思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。以上です。

【川勝知事】 西伊豆の発言者3さんと松崎の発言者4さんからのお話で、しっかりして

いるなというのが感想です。

発言者3さん御自身がデイサービスを経験されて、そしてボランティアをやって、自分のこととしてボランティア活動をされて、そしていろんな講習会に出られているという勉強熱心で感心いたしました。そして基本的に自分自身のためでもあり、同じような世代のためだということで、健康で長生きするにはどうしたらいいかということなんですね。

ちなみに、この健康寿命は世界でトップが日本です。日本でトップクラスが静岡県です。

ただ、静岡県でも地域差がありまして、誠に申しわけありませんけれども、伊豆半島はメタボと成人病の方が多いということがございます。そんなわけで、まだやるのが相当ありまして、もっと延びるといふふうに思いますね。要するに野菜とか、ビタミンCとか、あんまりしょっぱいものとか、酒は飲み過ぎないとかいうのが幾つかあると思います。

それからこちらの「ふじのくに型人生区分」を御存じでしょうか。これは皆様に配られていますか。これは皆さん高齢者という言葉があります、75歳になると後期高齢者。高齢者というのは、実は世界の用語でございまして、1956年に世界保健機構というのが導入したんですよ。そしてそれを1956年、昭和31年に日本の厚生省が65歳をもって高齢者にすると決めました。

その決めた理由は、1956年です。そのころの日本の平均寿命は60代だったんですね。今日本は平均寿命が世界トップになりまして、共に80を越えていますから、これ合わないですよ。そして健康寿命は静岡県の女性がトップで76歳です。だからこのところまでは、実はびんびんしているということなんですよ。

ですから、人生区分を日本の人口の現在の健康状況に合わせて変えようということになって、この間亡くなられた日野原重明先生などの見識を踏まえまして、昔60で出た老人病的なものが今出ません。そういうようなことがありまして、少年、青年、壮年、老年というふうに分けます。

少年は17歳までです、少年少女は、18歳から有権者になって青年になります。青年会議所が40までですね。しかし商工会議所とか商工会の青年部は、大体45歳以下にしています。だから青年は18歳から45までです。46から健康寿命が切れる76までが壮年なんです、30年間が。その30年間壮年の前期、壮年の真ただ中の壮年の盛期、それから66から76は壮年の成熟する熟期になります。

77になりまして老人の真似事をしていただきます。初老に入って無理しないということですね。人のためだけでなく自分のことも考えると。そして初老に入って、80の傘寿

を迎えまして中老になっていきます。88の米寿を迎え、90の卒寿を迎えますと長老になっていくんです。つまり偉くなっていくんですよ。だんだん偉くなっていくんです。これが静岡県の人生区分で、後期高齢者という言葉を使わない。

しからば、どのようにすれば健康寿命を延ばせるか。実は今、発言者3さんがおっしゃってました。ボランティア活動、サロンをしていくうちに今はものすごく重要な仲間だとおっしゃいました。実は静岡県が勝手にいろいろと調査した結果、三つのことをしている人が健康寿命が長いことが統計的に出ているんです。

まず食に気をつけること。食材は日本一ですから、439の品目があります。これはもう旬のものをいただく。

それから二つ目、軽い運動を継続すること。ラジオ体操をこの4月からやると、これは毎日やっていますからね、日曜日でもラジオ体操をやっている。

それから社会参加をする。この三つなんです。食事と軽い運動の継続と、それから社会参加、それやっているじゃないですか。だから発言者3さんは本当に元気で圧倒されます。それでその見本ということでこれをやってください。

それから、驚きました。「手づくり市」。こういう形で手作り、手芸というのは、皆さんアガサ・クリスティのミス・マーブルが必ずこれやっているでしょう。手を動かすということは頭が動くんですよ。だから手芸をやるというのは、ぼけない方法なんです。

手を動かす。だから農業をやるとか、あるいは音楽、ピアノを弾くとか、手芸をやるとか、これが実はぼけないことなんですよ。手と頭というのは関係しているんですね。だから手芸をやって、きれいで、楽しくて、色々な人が学べると。それを寄って、お寺でこういう法事とかいろんな行事以外のときにやるというふうにされて成功されているということですから、心の寿命にも、健康にも幸せ感をもたらしているのではないかということで、これは成功している理由だと思いますね。

それから今大事なことを言われましたね。八十八ヶ所ですね、伊豆半島八十八ヶ所のお遍路さん、これをやったらどうかと。どうでしょう、皆さん賛成ですか。じゃそれやりましょう。この美しい駿河湾に面しているところで、両指導者が賛成していただいたので、これはやりますか。やっている。ただちょっと廃れているお寺があるということなので、それをちょっと何すると。

それから歩いて回るので、静岡県はこちらは今サイクリストのメッカになりつつなっていますので、サイクリストは許されるのでしょうか。さすがですね。何でも許されるのが

お寺でありまして、ですからいろんな形でこの八十八ヶ所を巡って元気になって、そして達成感も味わえるということと同時に、伊豆半島の多彩な自然とか文化とか伝統に触れることができる。この八十八ヶ所は四国を抜きましょう。あちらは橋を渡らなくちゃいけないし、こちらは鉄道でも、高速道路でも、自転車でも来れますから、徒歩でも来れると。

伊豆半島は 13 市町があり、熱海とか三島を入れても 15 市町ですけれども、ですから歩いて回れる。そしていっぱい温泉もあるということで、歩いてよし、自転車でもよし、いろんな形で遍路巡りができるということです。

八十八箇所、これを観光の目玉の一つとしてやっていくと、静岡県、特にこの伊豆半島の魅力の向上に役立つのではないかというふうに思った次第であります。いい御提言をいただきましてありがとうございました。

ふじのくにでは後期高齢者という言葉は使わない。ちなみに先ほど言いました食事につける、それから軽い運動を継続する、三つ目、社会参加をする、これをやって厚生労働省から金賞を貰いました。日本の実はモデルになっているんです。ありがとうございました。

【発言者 5】 よろしくお願いたします。鯉節屋をやっています。僕で 5 代目になるんですけれども、本枯の鯉節、塩鯉、鯉の塩漬けを売っています。絶滅危惧種をつくる会社だと。本枯の鯉節を皆さん削らなくなりましたよね。この中で鯉節削り器を持っている人はいますか。圧倒的に多いですね、ありがとうございます。そういう方が日本中に多くいれば、うちの会社も安泰なんですけれども、なかなか本枯の鯉節を買ってくれる方が少なくなった、こういう現状の中で鯉節、あるいは塩鯉を売っています。

塩鯉に関しては、本当に絶滅危惧種なんです。鯉というのは黒潮の子と言われるくらい、太平洋側をずっと黒潮は上がってくるわけなんですけれども、日本中至るところに塩鯉の文化が、鯉の素干しですね、こういう文化があったんですけれども、それが日本中から消えて、唯一この西伊豆町の田子地区というところですね、ここにしか残っていない。まさに絶滅危惧種です。

これをつくる会社になります。細々と熱狂的なファンに支えられながら、本枯の鯉節、あるいは塩鯉をつくっています。鯉節の場合は、伊豆田子節という鯉節なんです、伊豆節というと、実は昔、鯉の三大名産品の一つと言われたんですね。土佐、薩摩、伊豆、この三つが三大名産品と言われたんですけれども、その三大名産品の一つの伊豆節です。こ

の伊豆節を確立したのが田子節と言われています。すごく由緒ある鰹節なんですけれども、実際に本枯の鰹節を日本で一番最初に江戸で発表した鰹節と言われています。

どういうことかということ、本枯節の基礎、大元を一番最初につくったのが田子節だと言われています。江戸で発表されて、江戸でたくさん評価されて売れたところから、日本中の鰹節屋さんが本枯の鰹節をつくったと言われています。ここで成功しなければ本枯の鰹節はできなかったかもしれない。あるいはもっと遅かったかもしれないと言われている鰹節になります。

そんな鰹節をつくる会社なんですけれども、やはり近年、慢性的な人不足だったりとか、あるいは原料の高騰、なかなかつくることのできないような現状になっております。特に魚の高騰はかなり深刻でして、海外の方がかなり高く、日本の鰹の値段がかなり上がっている。人材はいろんな形で、昔漁師だった方が退職してきていただくとか、そんな形で協力していただきながら、今も鰹節屋を続けております。ただし、やっぱり原料の鰹ですね、この原料が安定化することができれば、もっと仕事がしやすくなるんじゃないかなというふうに考えています。

今、伊豆田子節、鰹節ですね、あるいは塩鰹、こういうのがなかなか知名度が上がらない。伊豆に住んでいる人は知っていますけれども、東京に行ったりとか、関西の方ですと全く知らないですね、伊豆節なんか知らないよ、塩鰹なんか知らない。そんな中、新しい町長の元、推奨していますがG I 地理的表示保護制度、これにチャレンジして、塩鰹、あるいは田子節、これをぜひ登録していきたい。それで少しでもブランド化させて、日本国内の人だけではなくて、海外の人にこのことを知ってもらって、ぜひ食べてもらいたい。あるいは西伊豆に観光に来ていただく、こんな形に結びつけていければなと思っています。

あとハラールにも挑戦していきたいところですが、イスラム圏の方にもこういう鰹節とか、ハラールに入れるような食材をつくっていきますので、挑戦していきたいなと思っています。

もう一つ、僕がやっている団体で西伊豆しおかつお研究会、これは2008年から立ち上げ、県知事もよく御存じで協力していただいたり、支援していただいているんですけれども、平成26年のときには食の都づくり貢献賞を県からいただきまして、もっと頑張れと言っていただいたおかげで、何とかここまで頑張ってくることができました。

この西伊豆しおかつお研究会は、西伊豆にある特殊な食材、塩鰹、これを使って、この

塩鯉をみんなに知ってもらおう、日本中に知ってもらおう、あるいは世界の人に知ってもらおうという形で、西伊豆塩鯉、これを使って味をつけたうどん、西伊豆しおかつおうどん、こんなのをを使って、御当地グルメとしていろんなところに発信しています。

今では小学校の給食、中学校の給食、あるいは学校の授業で塩鯉、あるいは西伊豆、あるいは伊豆の鯉文化、こんなことを含めた授業として歴史を勉強して、その後でみんなでしおかつおうどんを食べる、こんな授業をやっていただいたりしています。こんな食育事業をこれからも続けながら西伊豆町の食育、そういうものに貢献していきたいと思っています。

この地道な活動なんですけれども、去年はご当地グルメの大会が富士で開かれたんですけれども、この富士の大会でなんとゴールドグランプリを西伊豆しおかつお研究会はいただきました。これも皆さんの御協力と御支援のおかげで、何とか静岡県内で1位になることができました。ありがとうございました。

4年前ですか、知事のところへ表敬訪問させていただいたんですけれども、塩鯉が「味の箱船」という絶滅しそうな中に選んでいただいて、これは静岡県で初めてだったので、それを報告させていただくために、県知事のところに行かせていただいたんですけれども、そのときにもお褒めの言葉をいただいたり、頑張れと言っていたり、そんな形がありましたけれども、それから頑張って、何と今年静岡支部を立ち上げることになりました。

伊豆半島全体で三島から西伊豆からいろんな方が参加していただいて、ほとんど経営者だったり、生産者だったりとか、そういう方が多いんですけれども、スローフードの静岡支部、何とスローフード富士山というのを立ち上げてまして、それでこれを日本中の人、生産者、技術者を日本中の人に知ってもらおうと。静岡県の人、伊豆半島に生産者、あるいは技術者、日本中の人、あるいは世界の人に知ってもらおうという取り組みをやっていこうと。あるいは世界の人が日本に来たときに、スローフードを通じてアグリツーリズムができたりとか、いろんなところを巡ってもらったりとか、泊まってもらったりとか、そういう取り組みをしていきたいなと思っています。

塩鯉に関しては、昨年11月22日、西伊豆町の民俗文化財に指定していただきました。塩鯉、正月魚、要するに鯉を正月に飾る文化ですね、これが西伊豆町の文化財に登録していただきました。こんなこともありまして、ぜひ県の方でもこういう塩鯉の文化を、西伊豆町に昔からある文化、これを登録していただくきっかけにしていいただければありがたいなと思っています。

あと研究会は今後、やっぱり活動している人というのは40代が中心で、だんだん、だんだん年を老いていくわけですね。先ほど県知事のお話もありましたように、若い人を育てていかなければいけないと。そういうわけで富士宮で高校会議所というのを立ち上げていますね。これに私ども賛同して、今度伊豆半島内に高校会議所を立ち上げようと、今準備をしているところになります。高校生のネットワークをつくって、これを全国に広げて、人脈の形成だったりとか、あるいは地域の活性化に繋げていくと。地元の食材、あるいは地域の観光、こんなことを子どもたちに考えてもらって、それを使った商品づくりだとか、あるいはご当地グルメをつくっていったりとか、そういう形で発信する場を高校生がつくって、それを私たち研究会、あるいは仲間が応援していく、こんな形をしていきたいと思っています。

ラグビー・ワールドカップとか、あるいは2020年にはオリンピック・パラリンピックがあります。このときに西伊豆しおかつお研究会もそこでご当地グルメを発信したいなと思っていますけれども、高校生がそこでいろんな地域のものを発信できたりとか、そういう場を与えていただくことができれば、僕たちもサポートしながら、西伊豆町、あるいは静岡のもの発信していければなと思っています。

これからも研究会、あるいは鯉節商店、頑張っていきますので、どうぞよろしく願いいたします。

【発言者6】 非常に最後というのは緊張して、どんどん皆さんのいい話を聞いているんですけど、全然頭に入ってこないんで、どうやって発表していこうかなと考えておりました。

私は薩摩揚げ屋を松崎の港の近くでやっております、以前は漁業、定置網の網元をやっていました。やはり隣の発言者5さんと同じように、漁業に携わって、それこそ塩鯉も、鯉節も会社でつくっております。およそ25年前ぐらいに、うちは漁船は廃業となりました、やはりそのときに僕も漁に行っていたわけですが、沿岸地域の魚、資源、大分日本一深い駿河湾でも非常に減っているという思いを実感しまして、若いころからいろいろ地域の活動に携わっているわけです。

今回、松崎ファン SUP イベントとあって、皆様わかりづらいと思うんですが、サーフボードに櫂を持ちまして、櫂というのは艦ですね、あれで漕ぐスポーツというか、そういうものというのが今非常に流行ってまして、それでちょっと集客イベントできないかなと。

また僕、やはり海に携わっていた分、最近の子どもって、やはり海遊びできなくなっているのかなと。海で、夏場もそうなんですけれども、遊びに行くとか、海遊びすることあまり見なくなったなど。うちは海岸まで本当に20秒ぐらいで海岸に行けるんですけども、うちの子どもでさえも10秒ぐらいで行けるプールに泳ぎに行くということで、海では全く泳がない、海で遊ばないというのをすごく感じまして、やはりそれは海で水に触れて遊ぶその教育というか、遊び方をもっと子どもに教えて、楽しく自然というか、西伊豆の松崎の自然を楽しんでもらって、大人になってから皆さんに紹介できるようになればいいかなと思います。

このイベントなんですけど、松崎へ人をたくさん呼んでイベントをやろうということで、前年、2016年からプレイベントとして開催いたしまして、協賛はいろんな大手の会社だったり、地域の方にも応援していただいて、このイベントをやっている。プラス、セイルメーカーとか、これからオリンピックに向けて活躍するヨットメーカーにも協力していただいて、できるだけ地域の人に参加してもらって交流していきたいなということで、結果的に去年の第1回大会で参加した延べ人数が149名で、そのうちの地域参加者が57名という形で、極力地域の方にも知ってもらって、自分のところの海で遊んでもらって、伊豆を訪れた人にも紹介できるように、ここでやっていこうと考えています。

やはりこれからどうしていくかということに関しては、やはり海辺のスポーツもそうなんですけど、恵まれた自然をどう遊んでいくとか、どう訪れた人に楽しんでもらうかということが課題になっていくかなと考えています。第2回大会を今年、やはり9月に開催する予定ですが、参加者200名を目指してやっていこうと考えております。

僕すごく地域の活動、イベント、松崎町はイベントがすごく多くて、みんな先ほど発言者5さん言われたように、イベントを開催している側がだんだん高齢化してきて、せっかくいいイベントをたくさんやっても、できなくなっちゃうというところがありますので、基本的な仕組み、どうやってやっていくか、どう来たお客さんに楽しんでもらうかということも含めて、みんなで考えていこうかなと考えています。

交流人口を増やすことというのは第一の目的なんですけど、西伊豆地区、松崎町内でも、なかなか今交流人口というか、隣の会社でだれが働いているか、あの子だれ？ということが非常に多くて、もうちょっと地域でつながって、お互いの考えを知った上で、外の地域の方と交流していくということがいいのかなと考えております。

やはりせっかく伊豆の特色である駿河湾、県内でも駿河湾の市町でうまくつながって、

駿河湾をブランドとして、この西伊豆地区は東の伊豆と違う特色を持っていることというのを僕はすごく感じます。駿河湾という言葉が、なかなか実際ここにおいて生活していても感じないというところがあるので、もっと湾内の海沿いの市町とつながって、もっと交流して行って、もっと駿河湾の魅力とかブランドとかというところを売り出していくのがすごくいいことかなと思います。以上です。

【川勝知事】 発言者5さん、発言者6さん、どうもありがとうございました。

発言者5さんのところは、しおかつおうどん、食べてない人いますか。それは人生の損ですね。私、大分前になりますけれども、これまた非常に魅力的な方たちが依田家の家を活用して、そこに民芸品を置きながら、非常にすばらしい地産地消の食事を出されているんですよ。

私そこに行って食事いたしまして、それで発言者5さんのところに行ったら、しおかつおうどんというものをつくったと。実は腹一杯だったんですよ。それで、おうどんと塩鯉と卵が載っているわけですね。見るからに美味しそうなんですよ。それで皆、実は腹一杯食べてきた。ところが皆それが入ったんです、別腹で。それぐらい美味しいんですよ。

そしたらこれがまたB級グルメでトップクラスになりまして、そしてノアの箱舟に準じた「味の箱船」、残すべきものということで、この塩鯉を入れて、これを残そうと。そしたらもう西伊豆町ではこれを民俗文化財にされたということで、このように塩鯉は急速に存在感を増しているということでございまして、私としましても、この塩鯉をどういうふうにしてさらに売り出していくかということは、塩鯉はおめでたい名前ですから、ぜひこれをいろんな機会に、給食でとおっしゃったので、これが一つかなと。

静岡県下に小学校、中学校 700 くらいあるんです。そのうち学校でお茶を飲んでないところが、500 くらいあって、200 校くらいしかやっていないことがわかりまして、一昨年の暮れに、できればお茶も給食のときに飲んでもらったらどうかというふうに言ったわけです。そしたら、牛乳を飲んでいるからお茶は要らないと言われたんですよ。煮物、お魚の煮付けを出して、ごはんと牛乳って合いますか。合わないでしょう。それはそうだ、だからどうしたらいいか。

牛乳は1時限目と2時限目、2時限目と3時限目、3時限目と4時限目の間に飲めばいいと。ごはん食べてこない子も、ときにいるんですよ。4時限目のときには全然集中力がありません。だから牛乳一杯飲むだけで大分違う。ですから配達が、1番に配達してくる学

校と、ちょっと遅れるところがありますから、ですから牛乳はいつでも飲むと。食事のときにはお茶を出すというふうにやったらどうですかと。そしたら全議員の先生が大賛成で、それで愛飲条例ができて、今 700 のうち、どのぐらいいっているかな、もう 500 ぐらい導入されているんですよ。

それで、まず塩鯉ですね、これ同じように条例つくっていただいて、といっても小学校幾つありますか。小学校は3つでしょう。それから中学校が2つでしょう。ここは松崎で、それでまずは西伊豆から制覇する、次に南伊豆に行く、それから下田に上がりまして、あちらの方で内陸に入って、伊豆、伊豆の国を制覇して、沼津まで制覇して、大体このあたりで、三島に入ると、あそこはまたコロッケでB級グルメをやっていますから、それから富士宮市、ここは焼きそばでしょう、この辺はB級グルメで自分のところを食べさせようとなって応援すると言ってあげればいい。

そのかわりしおかつうどんを、これちょっと高価なものかもしれませんが、ともかくお互いに交流することを通して、西伊豆の塩鯉、並びにしおかつうどんを、卵が入りますから、栄養があるんですよ、これ。ですから、特に冬なんか寒いとき、食べると温まります。今ちょうどいい。しおかつうどんの季節ですね。これぜひそういう形でみんな地産のものを使用することから始めていくと。そうするとどこの店でもしおかつうどんは西伊豆なり、松崎に入ると、出してくださるというそういう文化になっていくといいのではないかというふうに思います。

それから発言者6さんは、いいですよ、これ私さっき発言者1さんの話を聞いていて、こちら山でしょう、牛原山、こちらは海でしょう。海と山の風景の画廊ですよ、伊豆半島は。川端康成さんが『伊豆の踊子』を書かれた。もう一つ『伊豆序説』を書いている。『伊豆序説』は短いものです。せいぜい2ページぐらいです。

要点は五つある。一つ、伊豆は芸術の国である。一つ、伊豆は日本の歴史の縮図である。一つ、伊豆は南海の贈り物である。一つ、伊豆は海と山の風景の画廊である。すばらしい、海と山の風景の画廊である。それ自体がもう芸術だ。そして伊豆半島全体が一つの公園であると、こう言っていっちゃる。1930年代ですよ。本当にまだ若いときに、ノーベル賞を取るといようなことは、それは戦後のことですから。

海と山の風景の画廊、その山で楽しませようと発言者1さんはおっしゃっている。そして発言者6さんは海の方と。発言者6さん、そこが海で自分は漁もやったから海でやりたいと。今の日本の男の子、女の子も海であんまり遊ばない、地元の子も遊ばない、これは

何としてでもということ、板の上に乗ってパドルでやって競争するという、今年2回目だと、何としてでも、これを健康づくり、また海に親しむ、海から自分の家やふるさつを見る。

私は伊豆半島というのは、実際は海に出て見たときに津々浦々の世界でしょう。ここは津々浦々でつながっていたんですね。日本で津々浦々というのは、このためにあるんじゃないかと、それは思いますよ。ですから、そういう海から見た自分たちの景色というのを知るためにも、海に出る方がいい。そこで遊ぶ方がいい。遊ばせる方がいいということで、ぜひやっていただきたいと思いました。

それから、駿河湾をあまり知らないといいますが、実は西伊豆さんのおかげで駿河湾が世界で最も美しい湾のクラブに認定されました。これは、西伊豆さんはカレンダーをつくっておられる。夕日のカレンダーというのが有名で、数年前にそれをいただきまして、それできれいだなと思って、そして富山湾が世界で最も美しい湾クラブに認定されたというふうに富山県知事が僕に言ったんですよ。「それじゃどういふふうにしたらなれるんでしょうか」と言ったら、ここに連絡すればいいと。

それで、そしたらフィリピンで世界大会が開かれるというので、そこで何を言ったらいいか。ぜひそこで発表させていただきたいと、僕自身がやるということで、このときにあっそうだと思って、カレンダーは世界共通でしょう。日本語で書かれているけど、絵は見たらわかりますから、1月から12月まで全部富士山と駿河湾なんですよ、夕日の。感動しまして、これを持って、まだ余っているかと言ったら、余っていて、それを全部貰って、それは軽いものですから、かさばるけれども、それを全部持って行って、向こうに行って、配ったんですよ。私の話を聞いてない、カレンダー見ているわけです。百聞は一見にしかずで、見ている。

それで「見に来てください」と言ったら、何と理事長が見に来てたんですよ。どこを見に来たか。その黄金崎、あれ見たら、世界の人で見る目を持っている人が見たら、これは世界一だとすぐわかりますよ。パリの理事会に持って行って、メキシコの総会に持って行って、世界で最も美しい湾に認定されたのが一昨年です。西伊豆のカレンダーのおかげです。

それはしかし松崎から見ると、あるいは南伊豆からちょっと初めて富士山が見えますよね。そこからずっと富士山を見ながら、136号線は富士見街道ですよ。向こうはオレンジ街道、135号はね、ニューサマーオレンジとか、いろんなオレンジができる。こちらは富士見の街

道ですよ。全然景色が違う。しかも世界で最も美しい湾、世界で最も美しい富士山、世界文化遺産、それからジオパークでしょう。三位一体です。

だからこれは三位一体で売り出せばいいと思うので、沼津、一部は伊豆市も入っています。そして西伊豆に来て、そして松崎に来て、南伊豆まで、これは世界クラスだということで、海から楽しむようなものを考えると、これは行政区関係なくなりますから、これでやっていって、みんなに海に親しませるための色々なことをやっていく。

漁師の方だとか、漁師出身の方だとか、それからそこで食べるもの、例えば必ず発言者6さんのところの薩摩揚げを食べる。そして寒いときはしおかつおうどんを食べる。卵入りの温かいやつ、これを食べて体を温める。

そういうふうにして子どもたちに地場のものを楽しんでいただくということがすごく大事で、私どもは439ある食材、これを例えば同じミカンでも、ミカンは一つになっているんですよ。それを産地が違いますので、そこから食のセレクションとして、審査員に選んでいただいています。それから食品にしたもの、加工したものです、これは新商品セレクションとして、これもまた審査員に選んでいただいて、そうしたものの中に入ってきたんですよ。ですからいろんな形で静岡県は食材の王国ですから、食の都づくりをしたい。

そして世界七十数億のうち、10億以上はイスラム教徒なんです。一番たくさんいるのがどこかというインドネシアです。インドネシアは日本が好きなんです。

私は空港にハラールの食堂をつくると言ったんです、建物を大きくするので。そして、お祈りの場所もつくる。要するに部屋一つですよ。そしたらそれが聞こえたんですね、西ジャワ州の州知事に。突然来られた。話を聞いてみると、お宅はハラールの食堂をつくるらしいと、お祈りの部屋もつくる、そんな空港をつくるというのは聞いたことがないと。ついては調印したいということで調印しまして、それで今度3,500mの空港を2つ造るといいますよ。最初の提携をうちとやりたいと。うちは2,500m1本しかない。ただ、そのハラール食とお祈りの部屋をつくると言っただけで、これで向こうのハートを全部とらえた。

えらいことになってきまして、ハラール食は何かというとしおかつおうどんなんです、薩摩揚げなんです。要するに和食は全部ハラールなんです。アルコール使わないじゃないですか。使っちゃだめですよ、みりんに。そして豚肉を使わなければ全部ハラールなんです。何でもありません。おにぎりとお新香と、それと刺身で全部ハラールですよ。ですから、これはそういうものですから、決して難しいことじゃない。今日、黄金崎に行ったら無茶苦茶寒くて大変でした。こんなきれいなところなのに去りたくない。去りたくない

けれどきれいなんですね。寒いんですよ。早く帰りたいと思うけれども、あまりにもきれいだから、そういうところで本当に皆さん幸せになりまして、ここに立っておりますが、発言者6さんと、それから発言者5さん、こういう青年が若い人たち、また地域のために一生懸命やっけていらっしゃる。

だから何としてでもこの伊豆半島を元気にしたいと思って、ジオパークのことから始めて、ようやく形になりつつあったら、オリンピック・パラリンピックが来るし、自転車は、こっちは道路がないと思っていたら、マウンテンバイクリストにとっては、この道路がないことがいいと言うんですよ。景色はいい、人柄はいい、おいしいものが食べられる。そしてサイクリングについて関心があってオリパラも開かれると。ここはサイクリストの聖地だということで今いっぱい来ているでしょう。だから何が災い転じて福となるかわからないです。天国ですね。

ですから、先ほど八十八ヶ所の話もありましたけれども、自転車で回ることも許されましたからね。ですからいろんな形でここを楽しもうということで、なかんずく人の輪が大切で、賀茂地域1市5町、7万人を切りましたから、交流人口を増やしたいと思います。ここに定着している人が欲しいと思う。

ちなみに、今鯉節とか出ていますけれども、南伊豆にこの間天皇皇后両陛下がお越しになられました増養殖研究所という国立の研究所があります。そこに行きました。そしたらシラスウナギを人工養殖しているんですよ。これは鹿児島県の志布志と三重県と、ここしかありません。大量生産の実験をしているのはここしかありません。今シラスウナギ1,000匹養殖に成功した。すごいですねと言ったら、いや、1万匹やらなくちゃいけないと、そういう食べ物らしいですよ。だからそのうちこちらでウナギもできるかもしれません。

それからトラフグの養殖をやっているんですよ。トラフグはもう10万匹とか20万匹のレベルなんですって。したがって、そのうちこの伊豆半島はフグ刺しの名所になるかもしれないなど。それからアワビを、福島のアワビの養殖場から、その稚魚を持ってきて、それを育てて向こうに返しているそうですよ。

ただ、アワビはこの海は温か過ぎるからだめだと言っていたんですが、トラフグと何とウナギは養殖を今して、南伊豆のあそこは全然海に赤潮が発生しないので、200m先から採って、ものすごく使っているけれども、成功しているということを天皇皇后両陛下もお喜びになられ、写真が飾ってありまして、私はそれを見まして、ここはいろんな可能性がある。1市5町、特に賀茂地域が仲良くなりつつあられるということを喜んでおりまして、

今日はどうもありがとうございました。

【発言者2】 さっき自己紹介みたいなので終わっちゃったんですけども、ワサビが世界農業遺産になって、そのときは多分盛り上がると思うんですけども、それから今ワサビ農家さん、高齢化がすごい進んでいまして、そこから10年後とかになって、世界農業遺産なのにつくる人がほとんどいないとか、ワサビ沢が壊れたら、一人で直すのは結構厳しいとか、そういうのがありますので、ぜひ若者が新しく新規就農できる支援とか、ワサビ沢を直す支援とか何かそういうのがあると、せっかく世界農業遺産になって長く続くんじゃないかなと思います。

【川勝知事】 おっしゃるとおりじゃないでしょうか。ですからワサビも、チューブの練りワサビを使っている人がこちらに来て、本当の本ワサビを使われて、ちゃんと擦って、それを1回味わうと、チューブのワサビが食べられなくなるんですね。

それからワサビも、今いろんな形で活用されています。今はビーフステーキにワサビつける人いるでしょう。ワサビを今度はハイボールか何かに入れるとか、だからありとあらゆることが、だってあれじゃないですか、アボカドの寿司とか、牛肉の寿司まで向こうでやっているでしょう。ですから、ワサビというものは、我々は刺身であるとか、あるいはお寿司だとかということだけだと思っていると違うと思います。

ワサビはお醤油と合うでしょう。お醤油というのは、皆さん、フランス料理で日本のシェフがトップクラスをとりましたね。醤油味を隠し味に使うんですよ。今それは向こうでも使います。ですから、その醤油とワサビの相性がいいと。醤油というのは、実はフランス料理は要するにソースで勝負する。

こちらはとれたてのもの、しかしそれにたった1つだけの調味料、それは何かというと醤油なんです。すべて日本料理は醤油だけで、江戸時代に発明されて、それまではいわゆるたまりを使っていました。それが大豆から醤油がつかれるようになって、日本中に広まりましたね。日本海側というか、油の濃いやつは濃いやつで、瀬戸内海のところは温かい海ですから薄醤油で使います。そういうふうに醤油一本でやるんです。この醤油と一番合うのがワサビなんです。

ですからワサビというのは醤油が使われるところには全部使えるというふうに思いますし、これが需要が増えていくと、そうすると供給というか、つくる側に刺激が与えられる

ので、今心配されていますけれども、これがやりたいという人が増えてくるに違いないと。だからそのうち先生になられますよ。これから経営学をやるというんでしょう。ですからこれしっかりやってください。

これからはみんなが先生のとおりで、自分たちが人生生きてきたことをどのように孫の世代に伝えていくか、それをそれとなくこれしたいなと思っても、なかなか自分ではできないので、お仲間を使って一緒にやっているとやりやすくなる。だからもう 15 ぐらいで生きる道として、いろいろなものを提供していくというのが、これからの我々の仕事になる。

それから外国から学びに来ています。今 25 万、30 万近いですよ、留学生。日本人で行くのは 5、6 万で頭打ちです。もう学ぶことがなくなっているんですよ。ただし、開発途上国に青年海外協力隊として行っている子は相変わらずいます。ボランティアの仕事をしている青年はいるんですよ。だけど先進国に行っても、学ぶことがありません。ノーベル賞だって 21 世紀になって 20 人近いでしょう。アメリカに次いで全世界 2 位ですよ。

ですから実はこちらに学びに来たいというたくさんの海外の青年がいるんですね。何を学びたいんでしょうか。国際政治学じゃありません、物理学じゃありません、農業です、水産業です。自然のつくり方、清潔な生活の仕方、水の管理の仕方、こういうのを学びに来ているんですよ。ですから、実はこの伊豆半島で森を管理、木を管理、ワサビやあるいはシイタケをつくってきた、そうしたものが目を開けるような美しい景観なんですよ。これが実は教材になっているんですね。そのきっかけがジオパークですよ。そして松崎の高校生が、あるいは大仁の高校生が小学校に出前に行っているでしょう。あれは始まりですよ。それで先生になっていける。

それから観光も、いい加減に思われているかもしれないけれども、これは大学でも観光学部というのがあります。北海道大学、あるいは立教大学、あるいは和歌山大学で 20 世紀につくられました。今うちの県立大学、あるいは文化芸術大学で観光学を大学の教科に入れようとしております。そうしたものも松崎高校なんかで、今進学校のためのクラスだとかやっていますけれども、本当は観光のそういうのを学科にやった方がいい。

今サイエンスクラブの子どもたちが一生懸命やっていますけれども、ああいうものは伊豆半島の全体の知識やプレートテクトニクスについての知識がないとわかりませんから、プレートテクトニクスはユーラシア、北米、フィリピン海プレート等々、全部わからないといけません。それだけでも地球の半分ぐらい覆っちゃいますから。そうすると地球についてわかりつつ、この地域についてわかるということで、ものすごく大きな学問に開かれ

ているんですよ。ですから伊豆学なんですね。地球の中の伊豆学をやっていく。

伊豆学は実際はだれがやっているか、実践の学ですから、社会の実践をしている人たちが先生になるということで、そこには実は料理も入っています。だから今日の食部会でつくられたような方たち、あれはもう本当においしい。最後はニンジンのデザート、ゼリー、最後の仕上げはこの色なんですよ。夕日で終わっているわけです。つまり西伊豆の色でデザートを出されているんですよ。

そういうことで全員がそういうものの先生になれるということで、それをどのようにして子どもたちに伝えていくかということができると、みんながそういう面でのプロフェッショナルになって、そのうち海外からもこちらに住み着く人が出てくるんじゃないかというふうに密かに思っています。

大分夢が9年目にして叶いつつありまして、私はもう今日はあんなに美しい景色を見たのは生涯最高の景色でした。馬ロック、目が優しい。たてがみがあって、あんな優しい馬見たのはないぐらいです。それでもう向こうに富士山が喜んでいらっしゃるし、波はきれいだし、「わたつみの風清らかに吹き渡る黄金岬に」という感じで歌が出てくるくらいですよ。本当に今日は素晴らしい、皆様方に感謝したいと思っております。ありがとうございました。

【傍聴者1】 西伊豆町の傍聴者1と申します。景観施策について何点かお伺いいたします。

美しい伊豆とか、景観形成道路計画とかありますが、キャッチコピー的に言えば、自然と人工物の調和ということでしょうか。民間の看板などの屋外広告物の規制が始まりました。県や市町が設置している道路の案内標識があります。新しいブラウンのものと、古いブルーのものがあります。安全標識の裏面は白い色です。ガードレールは、まだブラウンのものは少なく、白が多いです。これらは早急にブラウンに統一されるのでしょうか。伊豆南西海岸は優先されるのでしょうか。

それから自動販売機は広告物になるのでしょうか。外壁装飾さえ、一部の地域では規制か、あるいは自主規制かわかりませんが、変更されています。知事も黄金崎へお出でになったということですが、「こがねすと」の左隣の展望台のところに赤い自動販売機が設置されています。このような例は規制できないのでしょうか。

道路、河川の管理についてもお伺いいたします。道路、河川も当然重要な景観構成要因

です。現状は幾つかの問題点があります。まとまった雨や強い風の後には、道路脇に落ち葉や枯れ枝の吹きだまりができます。これを清掃する体制ができていません。道路清掃車によるスポット的、あるいは定常的な作業が必要です。

草刈りについてですが、道路については年2回行われていますが、真夏にもう1回必要なのではないのでしょうか。河川の草刈りも臨時的には実施されますが、定期的には行われておりません。避難所になっているという問題もあります。ボランティア活動も必要と認識しておりますが、どうしても安全確保に問題が出ています。以上についての御検討をお願いいたします。以上です。

【川勝知事】 傍聴者1さん、どうもありがとうございました。景観について始まったばかりですね。ですから景観というのは公共ですから、家は自分のものだ、だけど外から見ると公共ですから、地域の印象を自分の持ち物が与える、これをどうしたらいいかということから始まって、違法のけばけばしい野立ての看板は撤去したらどうかと。どなたも反対されなかった。感心しました。数千あるんですから。今それ始めているわけです。そこから始まっているんですね。

ガードレールの色、それから標識の色、それから看板がイコール悪ではありません。いい景色にマッチした看板が必要ですし、また標識などは初めて来られた人たちにわかりやすいようにこれは必要なものです。ですからこれを始めたばかりですね。

清掃の問題は、なかなか自治体だけで全部できないところがありますので、やっぱり自分たちの周りは自分たちできれいにするというのを行政と一緒にやっていかなくちゃいけないと思います。

それから、自動販売機はなかなか難しいところがありますね、これ。並んでいると、これは決して品のいいものではありませんが、一方で自動販売機で喉を潤すことで助かった人もいるんじゃないですか、店が閉まっているときにね。なかなかこれ難しいところがある。それと同時に自動販売機が設置されているのは、自動販売機のお金を盗む人がいないからなんですね。ですからこの国が安全であるということの実は証にもなっているということもございまして、自動販売機イコールおかしいということもなかなか難しいと思いますが、黄金崎の「こがねすと」ですね、そこのところに自動販売機が2つありますね。全体の景観の中に自動販売機も上手に入れ込むようにデザインを考えないといけない時期がきているなと思います。

今言われたことは全部正論ですよ。だから網羅的に言われましたけれども、一つ一つできるところからチェックしていく。景観は公共のものだということですね。海と山の風景の画廊というこの川端康成さんの言葉、人工物と自然物でつくられている景色、これは人間がつくったものと、それから自然ですが、自然を我々日本人は借景として見ますでしょう。だから人間が手を入れてないところも、景色の一つとして借景として庭として見るというそういう感性を我々は持っています。ですから、そういう感性、歴史的なつくられた感性を、この伊豆半島でつくった場合にどういうふうにできるのか。それで西伊豆と松崎は元々きれいなところですから、ここから始めていくために、例えば賀茂地域も広いので、どこからやっていくのが一番いいかというモデルケースをどこかでやってみるといえるのかどうですかね。

ともかく景観というのが、実は言葉が通じない人にも、宗教が違う人にも共通してわかる言語として、美しいか汚いかということが基準になります。ですからこれからは汚いよりは美しい方が、汚れているよりも清潔な方がいいので、そういう景観づくりにボランティアの人たちも意識していただいて、行政も我々の方も意識して、識者の話も聞いて、どのようにすれば人々の需要と景色とがマッチするかというそういう基準みたいなものを西伊豆・松崎基準ではこうするというふうになると、それが伊豆全体に広がるかもしれません。

ともあれ、実は景観の看板は去年から始まったばかりですよ。だけど、一気に今おっしゃったように、問題意識が広がっているというのは、これはレベルが高い証拠ですね。課題がわかっている以上、問題の半分は解決できたと思っておりますので、今度来るときには、その辺がここまでやりましたということをお聞きできるんじゃないかと期待をいたします。お答えになっていませんけれども、景観が重要であるという認識の共有ができたんじゃないかと思っております、いい御指摘ありがとうございました。御礼申し上げます。